

ゴンザのロシア資料に現れる複数を表す接辞
—異なる言語間における過剰翻訳—

**PLURAL AFFIXES IN GONZA'S RUSSIAN MANUSCRIPTS:
OVER-TRANSLATION BETWEEN DIFFERENT LANGUAGES**



<https://doi.org/10.24412/2181-1784-2022-22-110-115>

久保 蘭 愛 KUBOZONO Ai

Ph.D, Aichi Prefectural University, Associate Professor
i_kb2n@jps.aichi-pu.ac.jp

ABSTRACT

This paper investigates Japanese translations of Russian plural affixes in bilingual Russian-Japanese manuscripts called Gonza's Russian manuscripts. These manuscripts were produced by Gonza (1718?–39), a Japanese boy drifted to Russia from Kagoshima, a southern part of Japan, in the first half of the 18th century. The language to which the documents were translated in those manuscripts is thus not the Standard Japanese but the Kagoshima dialect of the early 18th century. These documents are valuable for us in that they tell us a dialect of the past, especially, as these documents are written in Cyrillic, we can estimate its pronunciation of that time by comparison of their Cyrillic transcription with Russian. On the other hand, some artificiality is found in their Japanese sentences because of the influence of Russian from which it was translated.

In Gonza's Russian manuscripts, the singular and plural forms of Russian nouns tend to be translated differently, and the plural form of inanimate and animal nouns is marked with the -nando affix. On the other hand, in modern standard Japanese and the modern Kagoshima dialect, plural affixes are rarely used for inanimate and animal nouns. In addition, -nando in the modern Kagoshima dialect basically pick up one element from a set and indicates it as a typical example. It is likely that Gonza saw -nando and plural as similar in function and used it to translate the plural of inanimate and animal nouns in Russian. From this we conclude that this is a result of over-translation when trying to translate Russian, which has a different grammatical system from the Kagoshima dialect, rather than there was inanimate and animal-noun plural affix in the dialect

Keywords: Japanese translations, bilingual Russian-Japanese manuscripts, Kagoshima, Gonza, modern Kagoshima dialect.

1. はじめに

ある言語を別言語に翻訳する際に、我々はしばしば困難に直面する。例えば翻訳元の起点言語 (Source Language) やその文化圏には存在するモノが翻訳先の言語 (Target Language) や文化圏には存在しなかったり¹、類語があっても指示対象にずれがあったりする。モノや語の存在以外にも、SL で明示する文法的要素を TL では示す必要がないなど、文法面での差異も問題となる。

本稿では、18 世紀前半にロシアに漂着した日本の少年・ゴンザが、異なる言語であるロシア語を前に彼の母語を用いてどのように翻訳したのかを、特に名詞の単数・複数標示を中心にみる。彼が残した日本語資料 (以下ロシア資料と呼ぶ) には、名詞に接続して

¹ 「起点言語 (Source Language)」「目標言語 (Target Language)」の用語はジェレミー・マンデイ (鳥飼 監訳 2018) によった。

複数を標示すると思しい接辞がいくつか見受けられる²。本稿では、ロシア資料において単数・複数がどのように標示されるかを見たいうえで、名詞句のタイプごとにどのような接辞が標示されるかを示す。その上で、特に無生物名詞の複数形として標示される-nandoを取り上げ、現代鹿児島方言や現代日本語標準語の複数標示と比較する。その結果、無生物名詞に標示される-nandoは、ロシア語という日本語とは異なる文法体系を持つ言語を翻訳する際に生じた過剰翻訳であることを述べる。

2. ゴンザのロシア資料について

本稿が扱うのは、1729年にロシアに漂着した鹿児島の少年ゴンザとロシア人 A・ボグダーノフによって作成された、ロシア語と日本語の対訳資料群（辞書、文法書、会話集等）である。まずゴンザについて紹介しておきたい。彼の漂流と資料については、村山(1965)が詳しい。これによれば、次のような経緯があったという。

- (1) a 1728年、日本の大坂に向けて薩摩を出航した船が暴風雨に遭う。
- b 半年間の漂流を経て、1729年にカムチャッカ半島に漂着するも、現地人によって乗組員17人中15人が殺され、11歳の少年ゴンザと30代のソウザが生き残る。
- c その後、2人はロシア政府に保護され、サンクトペテルブルクに送られる。
- d ゴンザとソウザはロシア正教に改宗し、ロシア語を学ぶとともにロシア人に日本語を教えることになった。これは彼らが母国語を忘れないためであった。
- e 1736年にソウザが亡くなる。2人の世話をしていたロシア人、アンドレイ・ボグダーノフの指導のもと、ゴンザは1739年に21歳で亡くなるまで日本語資料の編纂に携わった。(村山1965を要約)

ゴンザとアンドレイ・ボグダーノフによって作成された資料は次の通りである³。

- (2) a *Вокабулы* (1736年)
- b *Преддвкріе Разговоров Японскаго языка* (1736年)
- c *Краткая Грамматичка* (1738年)
- d *Новый Лексиконъ Славено Японскій* (1736年9月29日～1738年10月27日)
- e *Дружеские Некоторые Разговоровъ Образцы* (1739年)
- f *Orbis Sensualium Pictus* (1739年)

これらの資料群はすべてロシア語を日本語訳したものである。ゴンザのロシア資料の価値の一つ目は、過去の方言を反映しているという点である。ゴンザは鹿児島出身であったため、資料の日本語は当時の鹿児島方言で書かれている。方言で記録された文献は少ないため、過去の方言の実態はよくわかっていない。この資料から方言の歴史の一端を知ることができる。

二つ目は表記の点にある。この資料は日本語部分もキリル文字で表記されていることから、日本国内で作成される日本語の仮名で書かれた資料よりも当時の音声を知ることができる。

² 日本語では複数を表すのに重複 (reduplication) や「諸-」など接頭辞もあるが、現代日本語標準語では非生産的であり、ゴンザのロシア資料でもこれらはほぼ見られないため、ここでは扱わない。

³ これらはロシア科学アカデミー東洋古文書研究所 (ИНСТИТУТ ВОСТОЧНЫХ РУКОПИСЕЙ РОССИЙСКОЙ АКАДЕМИИ НАУК) に保管されており、いくつかのコピーを日本でも閲覧することができる。

三つ目は対訳資料という点にある。日本語部分の語彙や接辞の意味・機能进行分析の際に、ロシア語単語の意味から日本語部分の意味や機能を推定できることがある。

ただし、この資料の日本語は語順が SOV になっていない、SL であるロシア語の影響を受けてややおかしい日本語になっている部分もあるなど、注意が必要な点もある。

本稿ではゴンザのロシア資料から文法書 *Краткая Грамматичка* を取り上げる。鹿児島県立図書館蔵の影印コピーを用い、翻刻・翻訳資料である村山(1971)を参考に影印から用例を収集した。

ロシア資料や現代日本語から例を挙げる際は必要に応じてグロスを示す。グロス一覧は末尾に挙げた。また本稿で問題となる部分を太字で示す。例文の「*」は非文法的であること、「?」は不自然な日本語であること、「#」は当該文脈では使用しないことを示す。

3. ロシア資料の複数接辞をめぐって

3.1. 現代日本語標準語の複数標示

まず現代日本語共通語の複数標示についておさえておこう。現代日本語標準語では名詞のタイプによって複数標示のあり方が異なる⁴。人称代名詞は単数か複数かを明示せねばならないが、人間名詞は名詞語幹のみで単数も複数も表すことが可能で、複数接辞を標示することもできる。しかし動物名詞や無生物名詞は通常複数接辞を標示せず、名詞語幹のみで単数も複数も表す。名詞のタイプによる数への感応の違いを、仁田(1997)は(4)の階層で示している。

- (3) a { #私-φ / 私-たち } が 運んだ
 b { 子供-φ / 子供-たち } が 5人 走った。
 c { 猫-φ / ?猫-たち } が いる。
 d { 木-φ / *木-たち } を たくさん 切った。
- (4) 人称代名詞 > 人名詞 > 生物名詞 > それ以外の名詞

3.2. ロシア資料に見られる複数接辞

ロシア資料の文法書 *Краткая Грамматичка* には次頁(5)のように単数形・複数形が示される。1人称代名詞は単数形 oi (ой) に対して nda (нда) という別語が複数を表しており、補充法 (suppletion) かと思われる(=5a))。3人称複数は、遠称を表す ano (ано) と「人々」を表す shi (шь) で表される(=5b))。それ以外の名詞の複数形では、名詞語幹に-tachi (тачь), -nando (нандо) が標示されており(=5c))、無生物名詞の複数形としても nando (нандо) が標示される(=5d))⁵。

	単数形	複数形
a	ロシア語: азь	мы
	ゴンザの訳: ой. или ойга	нда
	グロス: 1.SG, or 1.SG=NOM	1.PL
b	ロシア語: онъ	они
	ゴンザの訳: анофто	аношь
	グロス: あの 人	あの 人々
c	ロシア語: отецъ единс	множес
	ゴンザの訳: чечеоя	чечеоятачь

⁴ 3.1.の現代日本語共通語についての記述は仁田(1997)を参照した。例文は報告者による作例である。

⁵ -nando が複数を表しているかどうか、現時点では定かではないので、(5d)ではグロスに「?」を付した。

(5)	グロス :	父-φ	父-PL
d	ロシア語 :	древо единс	множес
	ゴンザの訳 :	ки	кинандо
	グロス :	木	木-PL?

これらを名詞のタイプごとにまとめると table 1 のようになる。ここで注目すべきは、動物名詞や無生物名詞に標示される **-nando** である。先に見たように、現代日本語標準語では動物・無生物名詞を複数標示することはほとんどない。18 世紀の鹿児島方言では、無生物名詞であっても複数であることを標示するのが一般的だったのだろうか。

table 1. *Краткая Грамматичка* における複数の表し方⁶

名詞のタイプ	複数の表し方
1 人称	suppletion
2 人称	-tachi
3 人称	shi, shi-tachi
親族名詞	-tachi
人間名詞	-tachi
動物名詞	-nando
無生物名詞	-nando

3.3. 現代鹿児島方言の単数・複数および例示

-nando の機能の手がかりを得るために、現代鹿児島方言話者に対し名詞の単数複数について聞き取りを行った⁷。文法的数を考えるにあたって「累加 (additive)」「連合 (associative)」「集合的例示 (group exemplar)」という数以外の意味区分をおさえておく⁸。「累加」は「同質な対象が複数存在する」(新永 2020) ことを表すものである(日本語標準語の「子供たち」=集合の構成員全員が「子供」)。「連合」は異質な構成員を含む集合を表す。日本語標準語でいえば「太郎たち」で「太郎とその友人」「太郎とその家族」を表すように、名詞語幹およびそれと関連のある集合とされる。このとき名詞語幹とその集合は聞き手にとって同定できるもの(=定・define)であるという。他方「集合的例示」は「連合複数」に似るが、日本語標準語の「(ほかにも誰かいたが)太郎など(がいた)」のように「名詞語幹の指示対象+聞き手が同定できない不定のもの」を指すとされる。

これを踏まえて現代鹿児島方言を見てみる。この方言では人称代名詞が複数であることを示すために必ず **-don** や **-taQ**⁹ を標示させる必要がある。このとき **-don** や **-taQ** は「連合複数」を表す。

- (6) { #oi / oi-don / oi-taQ }
 { #1-φ / 1-PL / 1-PL }
 ‘私たち’

⁶ 同じくゴンザのロシア資料の一つ *Orbis Sensualium Pictus* でも table 1 と同様の複数標示がなされる。ただし、*Orbis Sensualium Pictus* では接続がやや多様で、人間名詞にも **-nando** が標示される。この点さらに調査が必要である。

⁷ 調査日時：2022 年 1 月。話者情報：1949 年生まれ、男性、鹿児島県在住、外住歴 7 年。調査方法：アンケート用紙を送り、それを見ながら電話での聞き取り。今般の事情から直接会うことはできず、十分な調査もできなかった。

⁸ ここで取り上げた「累加」「連合」「集合的例示」という用語とその定義・説明は新永(2020)によった。

⁹ この方言では語末の母音が脱落し、モーラ音素化する。そのため複数接辞 **-tachi** は **-taQ** と実現する。

人間名詞は名詞語幹のみで「(累加) 複数」を表し、また複数接辞-taQ の標示も可能である。

- (7) { kodon-φ / kodon-taQ / kodon=no shi }
 { 子供-φ / 子供-PL / 子供=GEN 人々 }
 ‘子供達’

ところが動物名詞や無生物名詞には-taQ や-don は接続せず、-φ の形で「(累加) 複数」を表す。したがって、この方言は現代日本語標準語の複数標示と同じ仕組みを持っていると言える。

- (8) a { neko-φ / *neko-taQ } =ga sjaina-ka
 { 猫-φ / *猫-PL } =NOM うるさい-NPST
 ‘猫 (複数) がうるさい’
 b { ki-φ / *ki-taQ } =ga uwaQ-te-ru
 { 木-φ / *木-PL } =NOM 植わる-CONS-NPST
 ‘木 (複数) が植わっている.’

一方、-nando は基本的には例示を表すようである。

- (9) a hon-nando
 本-EXEM

‘本など (本と、衣類や布団など何かほかのもの)’

- b A-chan=ga kai-ta hon-nando=ga aQ-ta=doo

固有名詞-DIM=NOM 書く-PST 本-EXEM=NOM ある-PST=SFP

‘(ほかにも知らない人の本はあったが) A ちゃんの書いた本などがあったよ’

「例示」と「連合複数」の違いは判断が難しいが、(9)は「本」の多さを表しているのではなく、「本と他の何か」を表している。特に(9b)ではAが書いた本は一冊しか無いにも関わらず-nandoを標示している。したがって、-nandoは標示される名詞を一つの例として取り上げ、それ以外に不定のものを示す「集合的例示」と考えられる。

3.4. 過剰翻訳による複数標示の可能性

さて、現代鹿児島方言の動物名詞や無生物名詞は、現代日本語標準語と同様に複数接辞なしで複数を表すことができた。また-nandoは基本的に例示を表すようである。では、ゴンザのロシア資料ではなぜ動物名詞や無生物名詞に-nandoが標示されていたのだろうか。

これはおそらくロシア語と日本語の文法的な違いによる過剰翻訳ではないかと思われる。ロシア語は文法的に数の対立があり、可算名詞は単数か複数かを基本的に形の上で明示する必要がある。他方、先に述べたように日本語は動物名詞や無生物名詞などにあまり複数標示をしない。ゴンザが翻訳を行う際、名詞語幹そのまま訳出してもよかつたはずである。しかし、ロシア語名詞は単数形と複数形とが形態上異なっているため、その違いに対応して日本語の方でも何とか訳し分けようとしたときに、何か近い表現を用いて翻訳する必要があった。そこで、一つを例として取り上げそれ以外に不定のものが存在することを表す例示-nandoが、複数(特に連合複数)と近似した意味を持つとゴンザが捉えたために、無生物名詞や動物名詞の複数形として-nandoを用いたのではないだろうか。無生物名詞に標示される-nandoは、日本語には存在しない文法的な要素をどのように日本語として翻訳するかという彼なりの工夫だったものと思われる。

4. 結論

本稿では以下のことを述べた。

- (10) a ゴンザのロシア資料には複数を表すために補充法や複数接辞を標示などが

ある。

b そのうち、動物名詞や無生物名詞に標示される-nandoはロシア語を日本語に翻訳する際に生じた過剰翻訳である。

ただし、日本古代語では無生物名詞にも複数を表す接辞を付すことが知られており、いくつかの現代日本語方言でも無生物名詞に複数接辞を標示することができるという¹⁰。それらが例示を表すのか複数なのかは検討を要するが、他方言の様相も踏まえて考える必要がある。また、現代鹿児島方言の-nandoが全く複数を表さないかどうかについても、さらなる調査が必要である。

【グロス一覧】

1. -形態素境界, EXEM exemplar PL plural
2. 1 first person GEN genitive PST past
3. CONS consecutive NOM nominative SFP sentence final encliti
4. DIM diminutive NPST non-past SG singular
5. 【使用テキスト】
6. *Краткая Грамматичка* (原本は ИНСТИТУТ ВОСТОЧНЫХ РУКОПИСЕЙ РОССИЙСКОЙ АКАДЕМИИ НАУК 所蔵, 鹿児島県立図書館コピー参照)
7. 【参考文献】
8. 小田勝 (2015) 『実例詳解 古典文法総覧』和泉書院
9. 上林葵 (2017) 「関西方言における接尾辞「ラ」」『阪大社会言語学研究ノート』15
10. 小柳智一 (2006) 「上代の複数」『萬葉』196
11. 新永悠人 (2020) 「北琉球奄美大島湯湾方言の名詞・代名詞複数形の機能とその通言語的な位置づけ」『言語研究』157
12. 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説』くろしお出版
13. 村山七郎 (1965) 『漂流民の言語』吉川弘文館
14. 村山七郎 (1971) 『ロモノーソフ以前の二つのロシア文法』九州大学文学部言語学研究室
15. Jeremy Munday, (2008). *Introducing Translation Studies*. Taylor & Francis Group, LLC, New York (鳥飼玖美子監訳 (2018) 『翻訳学入門』みすず書房)
16. 【謝辞】
17. 英文要旨は岡田一祐氏 (北海学園大学), 北崎勇帆氏 (高知大学) にコメントをいただいた。御礼申し上げます。

¹⁰ 古代語については小柳(2006), 小田(2015), 関西方言については上林(2017)を参照。